みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

モンゴルの春：人類学スケッチ・ブック

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4579

プロローグ

日本製の4WD車が、草原のなかをすすむ。

草原といっても、まだ草は芽をふいていない。もちろん、丈ものびていない。銀煤竹の色をした平原である。車のすすむ前方には、わずかに轍がみえる。車輪におしつぶされてできた草の跡。それが、わたしのすすむべき道をしめす。ゆるやかにうねる大地。左手にみえる丘を右からまわりこえ、右手にみえる丘を左からまわりこえる。丘をひとつこえるたびに、つぎつぎとあたらしい風景が前方にひろがる。ラクダたちは、悠然としておどろかない。ヒツジやヤギたちは、あわただしくうごめく。

ここは、中国内蒙古自治区シリンゴル盟の中心地シリンホト市の郊外。

自治区の首府フフホト市からプロペラ飛行機でとぶこと二時間。さらに飛行場から車をはしらせれば、ほどなく草原へでることができる。一九八八年三月のことであった。

わたしを草原へはこぶ4WD車は、シリンゴル盟政府の外事課に属している。この課は、じつのところ、中国国際旅行社の支部でもあった。こちらが旅行者として訪問すれば、旅行社として対応するし、公務として訪問すれば、役所として対応する。きわめて臨機応変なる合理主義。今回は、どうやら後者のようである。通訳が二人もいるという豪勢なあつかわれかたから察するかぎり……。

車の運転手はモンゴル族。二人の通訳は漢族。そのうち貫禄のある年輩氏は、いくらかモンゴル語がはなせるほか、ロシア語と英語と日本語の通訳をひきうける。この人のまえでは内緒話ができないというわけ。若いガイドは、英語教師からトラバーユしたという新任。で、年輩氏が簡潔な日本語でいわく、「あなたの希望はかないます。老人の夫婦です。かれらには十人の子どもがいます。遠くありません。町から六十キロです。ウマもいます。もちろんヒツジがいます」と。

たしかに、わたしの希望はかなえられそうである。わたしの提示した条件がすべてふくまれていた。条件は三つ。町の中心部から半日ほどでいける距離であること。老人のすむ牧戸であること。ヒツジはもちろんのことウマの群れがいること。遠くないという条件は、わたしの希望というより、むしろわたしの行動を気づかう人々に対しての配慮であった。「老人」という条件は、昔のことをたずね、伝統的な考えかたを知りたいという希望にほかならない。ウマの条件もまた、ウマのことを知りたいと思ったからであったが、同時に、生活にゆとりのある牧戸を指定することにもなっていた。あくまでも牧区観察という名目で現地調査を許可してもらうためには、そのほうがよかろうと思われたのだった。

当時、わたしは内蒙古社会科学院に留学していた。訪問研究者となると、一ヶ月三百ドルもの研修料をしはらわなければならない。相当な高額である。留学生であれば、その三分の一程度の授業料ですむ。すすんで留学生の身分をえらんだことはいうまでもない。そして、一九八七年の十二月からフフホト暮らしをはじめた。わたしはできるだけおとなしく、まじめに、ただひたすら本をよむ留学生生活をはじめたのだった。

留学期間は十ヶ月。十ヶ月まるまる現地調査ができれば、うれしい。しかし、そんな希望は無理難題であるにちがいない。だったら、せめて一ヶ月。どうしてもみておきたい時期がある。子ヒツジ、子ヤギのうまれる頃である。牧区観察の目的や場所、期間などの項目をならべて、それらしい文書を作成し

た。観察許可をもとめる書類である。まず、留学先の社会科学院に提出したのが一九八八年の一月。書類はさらに自治区政府に提出され、めでたく許可をうけて、当地の政府にまわされてきているらしかった。三つの条件は、その書類にわたし自身が提示したものだった。

書類に明記された条件がみたされるとき、記されなかった希望はかなわないかもしれない。たとえば、外国人を接客するための特別の牧戸でないことなど……。わたしは、ふと不安になって、通訳の年輩氏に質問した。

「その家に外国人がとまったことはありますか?」

「はい。日本人のグループがきましたね。ほかにも何度か外国人たちがとまりましたね」

といわれて、少々がっかりさせられる。

「わたしたちは、町にかえりますから。あなたは一人で、そこの家にすみます。二週間したら、そのあと西烏旗にいきます。そこで、また二週間です」

一ヶ月の調査計画は、地元でこのように按配されていたのであった。外国人がしばしば訪問する牧戸、いわば特上の民宿に、二週間ずつ、二ヶ所にわけて滞在する、というわけである。この季節は、牧民にとってもっとも多忙な時期である。そのことが大きく影響しているらしかった。牧繁期に居候が歓迎されるはずはない。こちらにどれほど労働意欲があろうとも、半人前にもなりはしないだろうし。

按配された計画にしたがうことにした。場所をかえれば、いろいろ様子がちがうかもしれない。それもまたよし。とりあえず、一週間後に4WD車がまたくることになった。わたしの暮らしぶりを点検しておく責任があるのだろう。そこの家でうまく暮らせなければ、そのとき町へかえってつぎの地点へ移動してもいい。なるようになるさ。そこが民宿だからといって、そもそもがっかりする必要などないじゃないか。

前人未到の地の探検は、場所にあるのではなく、領域にある。だれもいったことのない場所にいくことが目的ではない。だれもやらなかった領域にわけいることが、わたしの目的である。たとえば、ヒツジやヤギの出産シーズンにおける人と家畜のかかわりかた。モンゴル独特のかかわりかたがあることはすでに紹介されている。しかし、観察にもとづいた報告はなかった。一年でもっとも多忙な時期こそ、人と家畜の関係が濃密になるにちがいない。どんなふうに濃密なのか？　それを観察することによってはじめて、モンゴル遊牧文化を把握し、世界のさまざまな牧畜文化のなかに位置づけるための糸口がみつかるのではないだろうか。

4WD車のゆく手に、人家がみえてきた。猛然とイヌがはしりでてくる。車の横にぴたりとついて、そのイヌは伴走する。時速六十キロの車との競走。しばらく並走して、いつのまにか後方に消えた。どうやらこの家ではないらしい。やがて前方にみえてきた人家は、わたしが居候させてもらうお宅の親戚だという。もうそろそろだろう。突然、車はおよそ九十度、方向を転じた。ブルルと大きな音をたてた。北へすすむ。正面に、四つのテントが一列にならんでみえる。モンゴル語でゲルとよばれる伝統的なテント式住居である。パオとして知られているのは、中国語である。はやくも車の音をききつけたらしく、家人たちがゲルからでてきて右往左往しているのがみえる。

車はもはや轍（わだち）をたどらない。あきらかな目的地にむかって、最短コースをとってすすむ。そして、四つのうち最大のゲルのまえにとまった。わたしのホームステイのはじまり。時空間がワープする、フィールド体験のはじまり、はじまり。